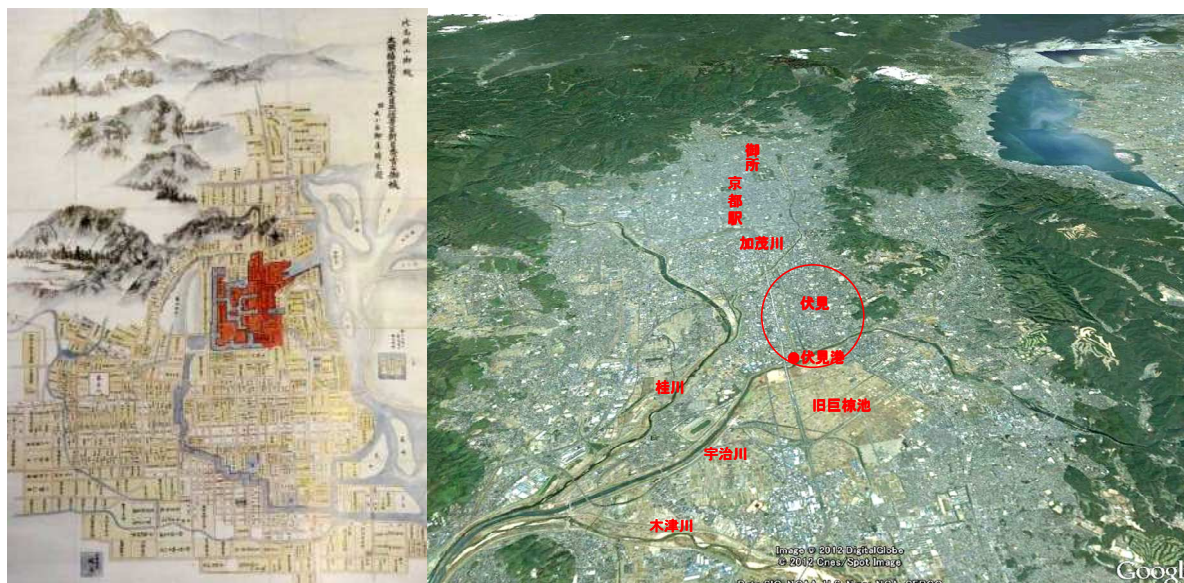


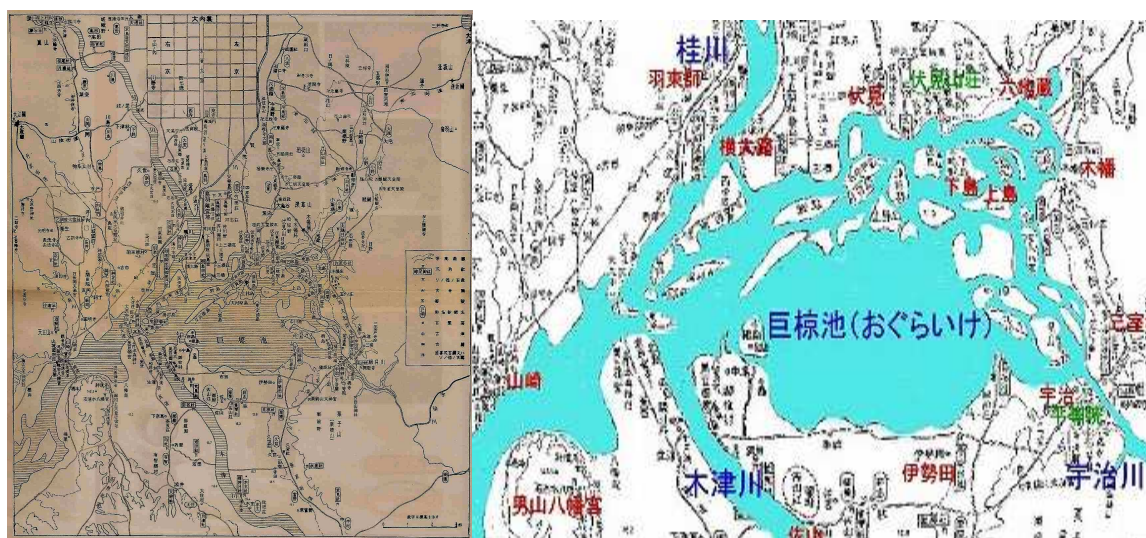
1. 京都 伏見の港 繁栄の歴史 概説

文禄3年（1592）秀吉による巨椋池・淀川三河川合流点周辺の改修と伏見港の建設

伏見港は秀吉によって作られた人工の城下町・港町



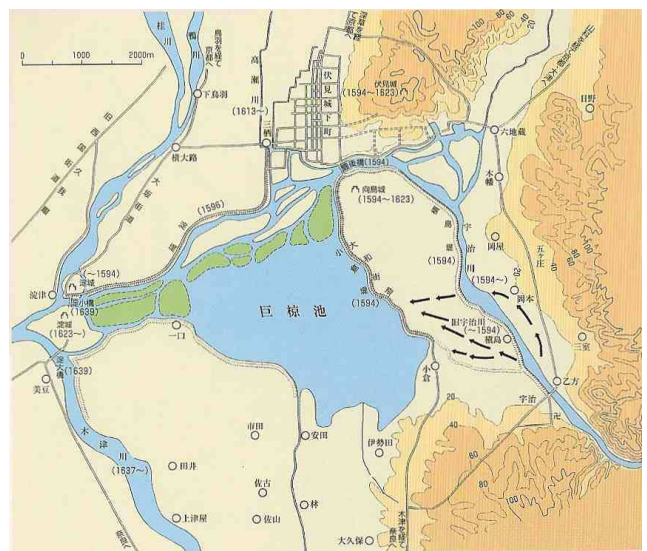
京都伏見周辺は大阪へ流れ下る桂川・宇治川・木津川の三河川の合流点の交通の要衝に位置する京都盆地南端の最低地で、もともとは南に広大な巨椋池が広がり、三河川の水路が複雑に入り組んだ低湿地帯の北岸であった。



秀吉以前 淀川へ注ぐ桂川・宇治川・木津川 三河川合流点 伏見周辺のもともとの姿

文禄元年（1592）年 豊臣秀吉がこの地に伏見城の建設を始め、伏見城築城とともに城下町の町割や開発を急速に進め、伏見城下整備の一環として、1594年（文禄3年）宇治川の治水および流路の大幅な変更を目的として、一般に「太閤堤」と呼ばれる槇島堤や小倉堤の建設をはじめとする大規模な工事を行ない、伏見には、宇治川と濠川を結ぶ形で港を設けた。同時に宇治橋の撤去および巨椋池を介した交通の要衝であった岡谷・津与（淀）津の役割を廃し、小倉堤の上に新設した大和街道と城下を直結する位置に肥後橋を設け、陸上および河川の交通を伏見城に集中させた。伏見城下は武家屋敷、寺社、町家、道路などの区画整理を行ない、城郭の西側を流れ、町の中心部を囲むように外堀が掘られた。掘り上げられた土砂でさらに西部の低湿地帯を埋立て、町人居住区の中核として南北に縦貫する京町通と両替町通が作られて、現在の町の原型を形作られた。

これらの大土木事業により、伏見城下・伏見の港は、大阪・京都そして日本各地を結ぶ交通の要衝となり、各地の有力大名や大名に呼び寄せられた数多くの商工業者が住み、三十石船が伏見と大坂の間を行き来する政治・経済の中心地として繁栄する。当時は、伏見～大坂間が淀川の舟運、伏見～京都間は陸上交通というのが一般的であり、伏見は舟運と陸路の中継点として重要な役割を果たしていました。淀川には秀吉が運航許可を与えた過書船が行き来していました。



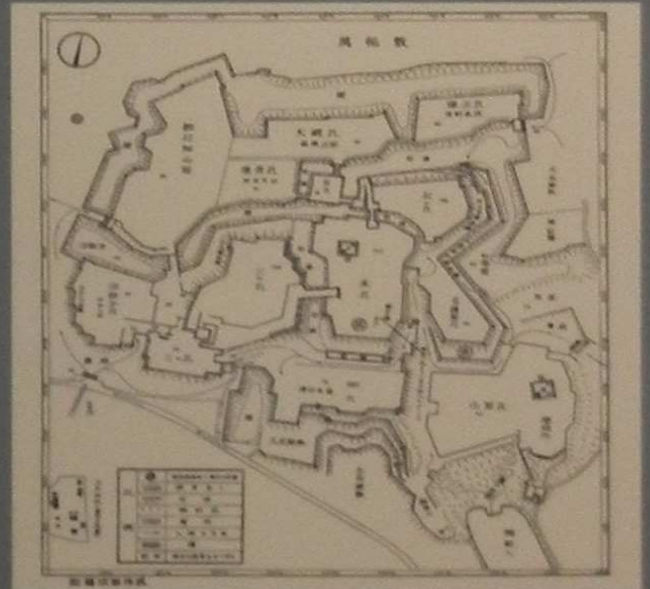
秀吉の時代の巨椋池沿岸図

当時の巨椋池には、宇治川・桂川・木津川が流れ込んでいたため、大雨が降ると巨椋池の周辺は洪水に見舞われていました。そこで、秀吉は巨椋池周辺に堤を築き宇治川の流れを変え、巨椋池の洪水を抑えるとともに、宇治川の流れを利用する伏見港を造りました。

伏見城

驚異的な速さで完成した大規模な城郭、そして秀吉の夢の終わり……。

秀吉は、1596年（慶長元）に指月城が大地震で倒壊すると、その10日後に指月城から1kmほど東北にある木幡山に新しい城を建てはじめます。翌年にはすでに本丸が竣工し、さらにその翌年には天守や殿舎も完成して秀吉と子どもの秀頼が入城しました。その規模は壮大で、多くの内堀を巡らした東西760m、南北870mにおよぶ大城郭でした。また城内には舟入御殿や茶亭、茶道の学問所が設けられました。秀吉は1598年（慶長3）8月、この城で最期を迎えています。



加藤文雄作成の伏見城復元図（加藤1953による）



伏見港と伏見の町

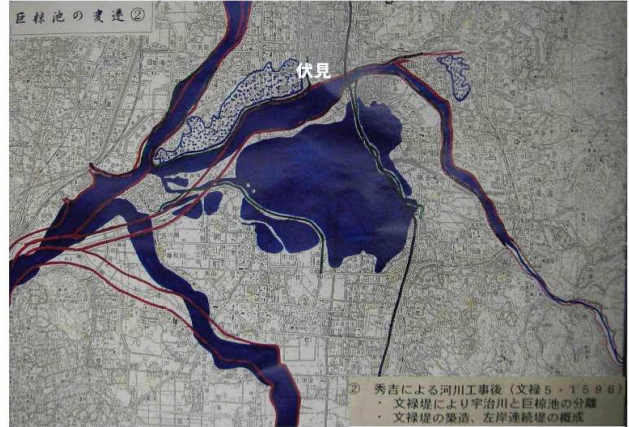
1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いにより、天下を掌握した徳川家康は、秀吉のまちづくりを引き継ぎ、伏見は江戸時代になっても依然として日本最大の城下町であり、政治都市でもありました。問屋や宿屋が建ち並び、酒造や竹細工など伏見独自の産業も生まれてきました。人口は増加し、伏見は庶民のまちとして大いに発展していきます。伏見と大坂間を通過船（三十石船）が行き来するようになると、伏見港は物資だけでなく多くの旅人で賑わうようになりました。1635年（寛永12）に参勤交代が制定されると、西国の大名は大坂から船で伏見港に上陸し、東海道を江戸へ向かうようになりました。このため伏見には多くの大名屋敷・倉庫・旅館が並び、伏見港は「京都と大坂を結ぶ」から「西国と東国を結ぶ」重要な拠点へと発展しました。この模型は、江戸中期の古地図を基に制作しましたが、町並みは少し誇張しています。



淀川改修・巨椋池干拓と三川合流点周辺の地形変化



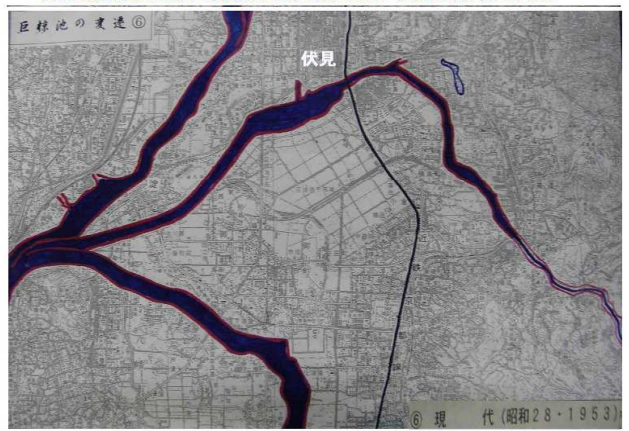
秀吉による河川工事前平安時代のままの姿
文禄堤（太閤堤）着手前 文禄以前（1590）



秀吉による河川工事後 文禄5年（1596）
・文禄堤の築造、左岸連続堤の概成・文禄堤により宇治川と巨椋池の分離
・秀吉の建設した城下町伏見に港が設けられ、交通の要衝になった



明治の改良後 明治18（1885）木津川の付け替え
明治35（1902）宇治川の付け替え



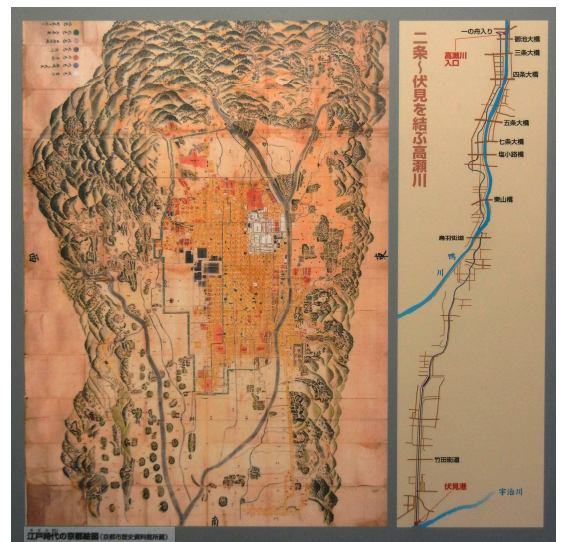
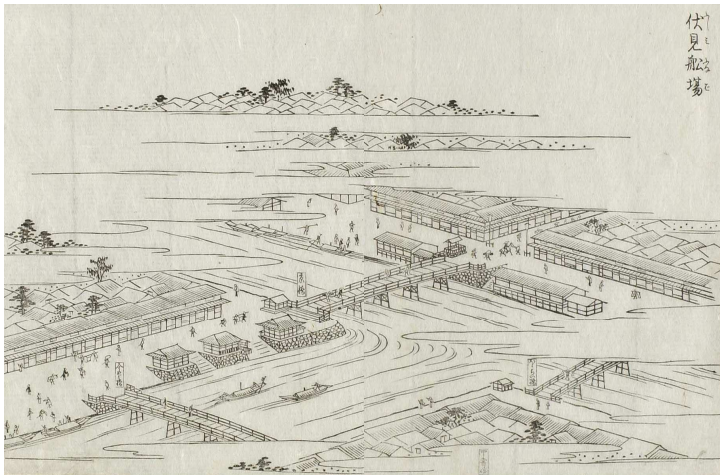
昭和の改修・巨椋池干拓後（現在）
巨椋池干拓 大正7年（1918）～昭和16年（1941）
三川合流点の道流堤、引堤等 昭和8年（1933）
今の堤が完成 昭和43年（1968）

◎ 1614年（慶長19）角倉了以による高瀬川を開削

伏見城が廃城となった後の江戸期も 伏見は交通の要衝として栄える。

特に京都の豪商・角倉了以が、1614年（慶長19）に高瀬川を開削し、高瀬川を通じて伏見から京都へも舟で輸送できるようになり京都と伏見が結ばれたことから、港の役割はさらに増した。伏見港は伏見と大坂を航行する過書船、伏見と京都を行き来する高瀬舟の発着点となり、舟運交通の中継拠点としてさらに繁栄を遂げていきました。

幕府の伝馬所（問屋場）も置かれ、参勤交代の大名が立ち寄るために本陣や大名屋敷も置かれていた。幕末期には坂本龍馬が伏見港の船宿である寺田屋を常宿としていたのは有名である。



1614年（慶長19）角倉了以による高瀬川を開削

◎ 淀川の治水と淀川水運の両立のため 明治 27 年（1894）琵琶湖疏水（鴨川運河）の開通



淀川は昔から氾濫を繰り返し、そのたびに伏見周辺の住民は洪水に悩まされてきた。

伏見周辺の治水の歴史は豊臣秀吉が伏見に城下町を築いた時から始まり、土木行政の近代化が急速に進んだ明治時代にはオランダ人技師ヨハネ・デ・レーケらの指導による大規模な治水工事が行われた。

- ・ 明治 18 年（1885）木津川の付け替え
- ・ 明治 35 年（1902）宇治川の付け替え

これにより、ほぼ 現在の淀川の姿となったが、さらに大正・昭和になっても治水工事が続けられた。

鴨川運河（琵琶湖疏水）の開削 明治25年（1892）

京都に近代化をもたらした琵琶湖疏水の分流的性格を有する水路が開鑿された。これが鴨川運河とよばれている。

“「鴨川運河」 琵琶湖疏水の建設に引き続き開削された水路。明治 25 年（1892）に着工、同 27 年（1894）9 月に開通。鴨川の夷川の地点から鴨川東岸に沿って南下し、七条以南は鴨川筋を離れて伏見に達する。勾配の関係で途中 8 ヶ所に閘門をもち、28 年（1895）には伏見にインクライン（傾斜鉄道）が完成、高瀬川が薪炭・肥料など日用物資の移入ルートに用いられたのに対し、産業物資輸送を目的とする。これにより、大津—琵琶湖疏水—鴨川運河—伏見の全長 20 キロ余の舟運ルートが完成した。”

なお、背割堤は京都府八幡市の北辺に位置し宇治川と木津川を分ける細長い桜堤の堤防で、明治初期、木津川の付け替え工事に伴ってできた宇治川左岸、木津川右岸の堤防の一部。明治 30 年（1897 年）から宇治川の改修工事が始まり明治 43 年（1910 年）に完成し現在の姿となり「背割堤」と呼ばれるようになりました

明治 27 年（1894）琵琶湖疏水（鴨川運河）が開通すると疏水とも接続新たな水運のルートが拓かれた

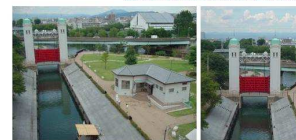
ほか、宇治川も新たに開削されたことから琵琶湖へ大型船の就航が可能となり、大阪や琵琶湖へ蒸気船（外輪船）が就航した。しかし、鉄道や道路の発達に伴い、物資輸送量は減少し、大正 9 年（1920 年）に水運は廃止。

1929 年、宇治川の堤防が整備され宇治川と濠川に水位差が生じたため三栖閘門が建設される。

蒸気船による水運は京都市と大阪市などを結ぶ鉄道が開通したことや淀川（宇治川）での水運の衰退とともに港も衰退した 1962 年（昭和 37）には貨物船輸送も完全になくなります。

[illegible]

三栖閘門



◎ 三陽門「ハイパスゲート」(前扉)




三陽門・前扉室 門開ゲート 八幡製鉄所の表示

型式 鋼製スライドゲート 門高 2門
 扉体幅 1,640mm 扉体高 1,480mm
 扉厚 1,200mm 扉体重量 0.697t
 設置年月 昭和26年3月 製作 近畿設備株式会社

◎ 三陽門「後扉室」の旧夜上機



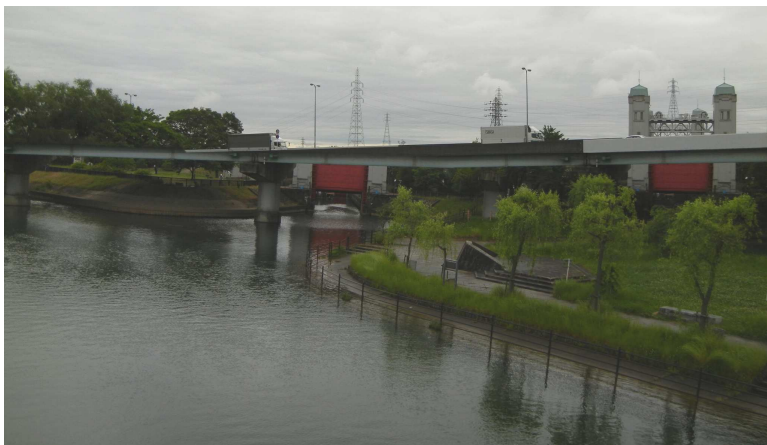
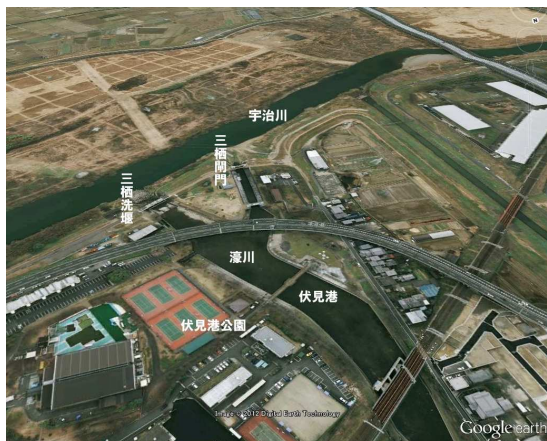

1930年 重要な役割を果たした。

1922 年に始まった宇治川右岸 観月橋から三栖までの堤防整備により、宇治川と濠川に水位差が生じたため 1929 年 宇治川と濠川との合流点に閘門を設け、舟の通行ができるように三栖閘門が建設された。

1962 年に船運がなくなり、天ヶ瀬ダムで宇治川の水位が低下したため、三栖閘門はその役割を終えました。

第二次世界大戦後はほとんど使用されず放置されていた伏見港は 1967 年、跡地を埋め立てて公園とする都市計画が決定され事業化されたことにより港湾機能を喪失した。

周辺には京橋・表町・柿ノ木浜・金井戸・北浜・西浜・南浜・東浜・弁天浜・材木町といった、港町に因んだ地名が残っている



伏見港・濠川から眺めた宇治川への出口に設けられた左:三栖洗堰 右:三栖閘門 2012. 5. 15.

宇治川の氾濫原因と治水対策

